
NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2025.2

国立国会図書館 月報



特別対談 季武嘉也 × 前田亮介
資料探索のこれまでとこれから
～近現代政治史の資料をめぐって～

電子資料の長期保存 ABC② CD の長期保存

『国立国会図書館月報』読者アンケートの結果から

国立国会図書館 月報

NO. 766
FEBRUARY 2025

CONTENTS

- 1 『天体旅行』
― 大正時代の宇宙旅行 ―
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 7 特別対談 季武嘉也×前田亮介
資料探索のこれまでとこれから
〈近現代政治史の資料をめぐる〉
- 17 電子資料の長期保存ABC②
CDの長期保存
- 22 『国立国会図書館月報』読者アンケートの結果から

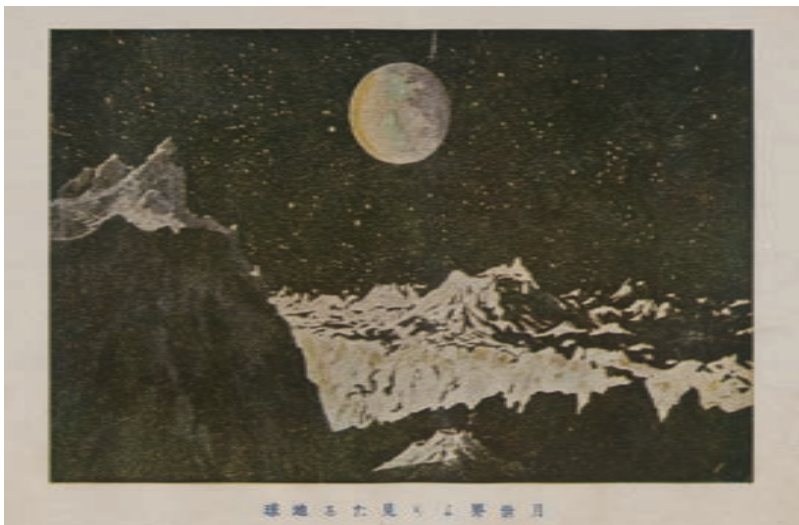
- 6 館内スコープ
あらゆる人のために
- 21 本屋にない本
『インキュナブラの時代 慶應義塾の西洋初期印刷本コレクションとその広がり 第30回 慶應義塾図書館貴重書展示会』
- 25 NDL Topics



表紙：90年前に開業した築地市場の全景図
『東京市中央卸売市場築地本場・建築図集』
東京市 昭和9年 27cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1264571/1/15>

『天体旅行』 — 大正時代の宇宙旅行 —

鈴木 加 成 太



口絵「月世界より見たる地球」



扉絵

『天体旅行』

永代静雄 著 自学奨励会 大正7(1918)年
312p; 19cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/953652> (モノクロ画像)

ユーリ・ガガーリン(1934~1968)が人類で初めて宇宙に到達したのは1961年のことでした。ところが、その四十年ほど前に宇宙を旅した少年がいたのです。少年の名は日下照二君。本書の主人公です。

照二君は十三歳の中学生。父の日下博士は世界的な天文学者で、いくつもの観測設備を備えた天文台で日々研究にいらしています。夏休みに寄宿舎から帰省した照二君は、ひと夏の間に一人前の少年天文学者になってしまおうと大はりきり。兄の光一君や天文台の空知理学士、天文に詳しい乳母から、星座にまつわる神話や星の名前などを学んでいきます。

そんな中、日下博士が月へ行つて帰ってきたという大ニュースが！博士は、自ら作り上げた「電号」に乗り、たった二日で地球と月を往復したというのです。ますます宇宙への憧れを募らせる照二君。すると、その翌日、米国からやってきた天文学の権威・ヘール博士を囲む朝食の席で、ヘール博士は「どうだ照二君、この紅茶が済んで一服したら、準備をして、すぐ火星へ行つて来ようじゃないか」と切り出し……。

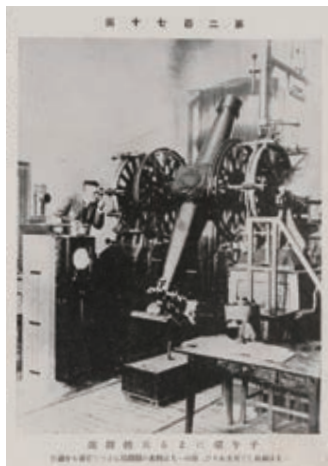
さて、日本に科学的な宇宙旅行を紹介したのは、SFの父といわれるジュール・ヴェルヌの小説『月世界旅行』でした。明治初期



ヴェルヌの『月世界旅行』では、砲弾に乗って月へ向かう。(図版出典：ジュール・ヴェルヌ 著、井上勤 訳『月世界一周』博聞社、1883 <https://dl.ndl.go.jp/pid/896835/1/166>)



第5回内国勸業博覧会の会場でイルミネーションを楽しむ人々 (図版出典：『東京電気株式会社五十年史』東京芝浦電気、1940 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1869368/1/96>)



(右) 日下照二君

(中央) 日下博士の天文台の装置。子午環（天体の赤経・赤緯を精密に測定するための観測装置）と思われる。

(左) 実際の子午環による観測の様子 (図版出典：伊藤靖 編『万有科学大系〔正〕』第1, 万有科学大系刊行会、1926, p.372 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1017375/1/200>)

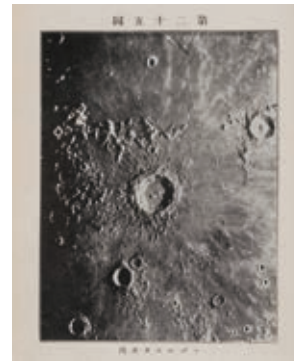
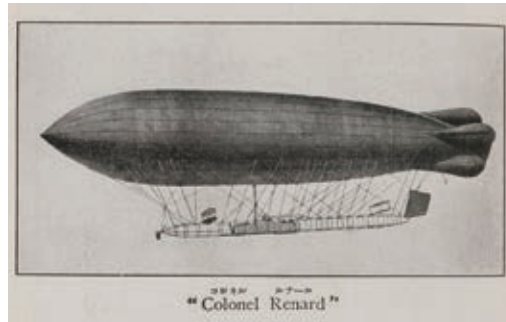


本書刊行当時の日本の代表的な天文台・東京天文台（麻布）。現在の国立天文台の前身に当たる。(図版出典：伊藤靖 編『万有科学大系〔正〕』第1, 万有科学大系刊行会、1926, p.402 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1017375/1/215>)

の日本ではヴェルヌ作品が次々と翻訳され、「新智識に飢ゑたる青年の好奇を満足せしめた」(内田魯庵「明治の翻訳」)と歓迎されていました。ヴェルヌの『月世界旅行』も明治13(1880)年以降、翻訳書が繰り返し出版されています。

空想上の宇宙旅行は、博覧会や映画を通じて人々に身近なものになっていったようです。第5回内国勸業博覧会(大阪・明治36年)では、月世界のパノラマや望遠鏡の展示とあわせて映画「月世界旅行」が上映され、「面白いのは活動写真の月世界旅行」(山下雨花「余興と飲食物」)などと好評を得ました。この映画は、翌年には日本最初の常設映画館・電気館(浅草)でも上映されて評判を呼んでいます。

こうした盛り上がり背景に、明治後期からは、国内の作家の手によるさまざまな宇宙旅行ものの科学小説が発表されるようになります。本書もその一つですが、「子供の読物が立派であつて、内容の善く、子供の興味に適する物であれば、それは学校の教育や、家庭の教育を助けて、強い力となる」(高島平三郎「用心すべき子供の読物」)という意図のもとで発行された「家庭自学文庫」の一冊という位置づけからか、科学的な色の濃い作品となっています。

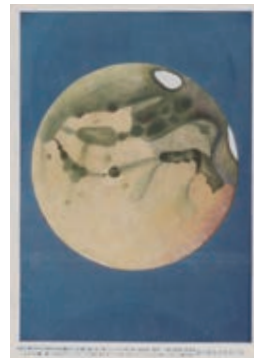


大正元（1912）年に刊行された一般向けの科学解説書に掲載された月と月面の写真（図版出典：一戸直蔵『月』増訂再版、装華房、1912 <https://dl.ndl.go.jp/pid/935846>、98コマ目・101コマ目）

（右）火星へ出発する「電号」

（中央）似た形の飛行船の例（1909年のフランスの飛行船）（図版出典：尾崎行輝『征空』武俠世界社、1916 <https://dl.ndl.go.jp/pid/955083/1/54>）

（左）少し後の時代の飛行船の例（1926年のノルウェーの飛行船）。飛行船は北極探検（1926年）や世界一周（1929年）に使われるほど発達した。（図版出典：伊藤靖編『万有科学大系〔正〕』第5、万有科学大系刊行会、1926 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1017444/1/42>（モノクロ画像））



（右、中央）大正7（1918）年、大正15（1926）年に刊行された資料に掲載された火星の図。本書では、「電号」の中から目的地の火星を観測する様子も描かれる。（図版出典：伊藤靖編『万有科学大系〔正〕』第1、万有科学大系刊行会、1926 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1017375/1/57>（モノクロ画像）、愛知敬一『自然の美と恵 科学叢話』丸善、1918 <https://dl.ndl.go.jp/pid/956663/1/13>（モノクロ画像））

（左）1908年に米国で撮影したものとされるモアハウス彗星の写真（図版出典：伊藤靖編『万有科学大系〔正〕』第1、万有科学大系刊行会、1926、p.151 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1017375/1/85>）

たとえば、当時の宇宙旅行ものの小説では、月で生命体や文明に出会うといった荒唐無稽な筋書きが定番ですが、本書では、月には「不思議な微細な、色の強い下等植物」が生えていただけだったと控えめに語られています。また、飛行船の形をした宇宙船「電号」は白く輝く特殊な金属製とされており、これは、ドイツで工業化に成功したアルミ合金・ジュラルミンが、本書刊行の4年前の1914年にツェッペリンの硬式飛行船の船体に取り入れられたことを思わせます。

一方で、他作品ではしばしば退屈なもの、無機質なものとして描かれる宇宙空間の航行の様子を、詩情豊かに描いている点も特徴の一つです。たとえば、照二君が火星に向かう「電号」の中から彗星を眺める場面は次のように描かれます。

その彗星の心は、恐らく直径にして何千里もあるであらう。（中略）尾の長さは何億里あるであらうか、肉眼でさへも、それは全く光の大河の如くに近々と輝いて見られた。

「あ、綺麗だ！ 僕、ハーモニカを吹かうや。」

（中略）快い行進曲が電号の金属の壁から壁へと反響した。

永代静雄が執筆した少女・少年向けの小説



永代静雄肖像（図版出典：日本電報通信社 編『新聞総覧』大正4年，日本電報通信社，1915，p.57 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2387636/1/44>）

『透視液 探偵小説』忠文堂書店，1918 <https://dl.ndl.go.jp/pid/908030>（モノクロ画像）

「電力飛行機」を発明した少年博士が活躍する話や、水空両用の「飛行式潜航艇」が登場する話など4編を収める。



『アリス物語』紅葉堂書店，1912 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1168394>

冒頭の3編以外は永代の創作で、少女へ向けた教訓が盛り込まれている。



『外相の奇病 神秘探偵』実業之日本社，1919 <https://dl.ndl.go.jp/pid/913476>（モノクロ画像）

人の心を読める天才少年理学士が、少年探偵たちとともに外交機密漏洩事件を解決する。

- 『新潮』第16巻第5号，新潮社，1912.5 <Z13-583>
- 『実業世界太平洋』第1巻第5号，博文館，1903.4 <雑37-15イ>
- 『児童研究』第23巻第10号，児童研究発行所，1920.5 <Z7-340>
- 『創作』第16巻第11号，創作社，1928.12 <Z13-613>
- 『中央公論』第38巻第10号，中央公論社，1923.9 <Z23-9>

※引用の旧字は新字に改めた。

※<>内は当館請求記号

永代は記者稼業のかたわら、いくつかの小説作品を執筆しており、本書のほかにも「不思議の国のアリス」を翻案した『アリス物語』や、SF的な要素をもつ冒険探偵小説などが残されています。『天体旅行』の、科学的でありつつも明るく美しい宇宙旅行の描写からは、子どもたちに豊かな未来を夢見てほしいと願う永代の思いが伝わってくるようです。

著者の永代静雄（1886～1944）は、田山花袋の小説「蒲団」（明治40年発表）に登場する小説家志望の青年・田中秀夫のモデルとして知られた人物です。永代は実際に小説家を志していたようですが、明治41年末に本格的な新聞社勤めを始めると、新聞記者としての才能を開花させ、「如何にも新聞記者らしいスマートさ」（光用穆^{みつもちゆし}「中央新聞時代」）、「稀に見る名編輯記者」（松崎天民「新聞記者懺悔録」^⑤）と評されました。

明治～昭和初期の主な宇宙旅行もの科学小説

年	著者／訳者	タイトル	内容	宇宙船の形状	月の住民
1883	井上勤	『月世界一周』	ヴェルヌ『月世界旅行』の翻訳	弾丸	月に到達せず
1887	勝岡信三郎	『宇宙之舵蔓 文明世界』	天才学士のチャールスが月の文明を地球に伝える	気球、車（月界の乗り物）	あり
1906	羽化仙史	『月世界探検 冒険小説』	公爵夫婦が月世界に攻め込む	弾丸	あり
1907	堀内新泉	「月世界探検隊」 （『探検世界』4巻3号）	英国探検隊が火星と月を探検し月の首都に行く	飛行船	あり
1907	江見水蔭	「月世界跋渉記」 （『探検世界』4巻3号）	博士、助手、中学生が月を探索する	不明（羽やマストがある）	なし （古代遺物あり）
1907	押川春浪	「月世界競争探検」 （『探検世界』4巻3号）	月で行方不明になった東大教授を競争で探す	飛行船	言及なし
1907	天空海濶道人	「月世界新婚旅行」 （『探検世界』4巻3号）	新婚の天文学者が同士50余人と月を探検	不明（甲板がある）	あり
1908	天馬楼主人	『月世界旅行記』	ポー『ハンス・プファールの無類の冒険』の翻訳	気球	あり
1909	増本河南	『冒険怪話 空中旅行』	少年が火星人に連れられて月と火星を見聞	船（火星人が製造）	あり
1910	黒岩涙香	『破天荒 新説』	ジョージ・グリフィス <i>Honeymoon in Space</i> の翻訳	紡錘形	あり
1917	宮地竹峯	『月世界旅行 怪奇小説』	ウェルズ『月世界最初の人間』の翻案	気球	あり
1918	永代静雄	『天体旅行』	少年が父、兄、博士と火星へ向かう	飛行船	なし （植物はあり）
1926	野村胡堂	『太郎の旅 月世界のたんけん』上、下	太郎と花子が博士らと月世界人を助けに行く	卵型	あり
1926	小鹿青雲	『地球から天の川へ 星界飛行周遊』	小泉博士率いる星界周遊団一行が太陽系の諸惑星を巡る	ロケット	なし （火星人は存在）
1929	天野梅雄	「月へ飛ぶ」 （『科学画報』13巻1～6号）	ウェルズ『月世界最初の人間』の翻訳	球体	あり
1930	野村胡堂	『火星探検 外一篇』	博士一行が地球の事件を解決した後火星へ向かう	卵型	——
1936	K・K生	「昼寝の夢」 （『軍事と技術』116～117号）	船長に率いられた乗組員が月へ向かう	ロケット	月に到達せず

※本表は以下の文献を参考に筆者作成。

- ・横田順弥『日本SFこてん古典 1』早川書房, 1980 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12461312>
- ・横田順弥『日本SFこてん古典 2』早川書房, 1980 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12461313>
- ・横田順弥『日本SFこてん古典 3』早川書房, 1981 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12461314>
- ・長山靖生『日本SF精神史』完全版 河出書房新社, 2018 <KG381-L159>

○参考文献

井上熊次郎 編『第五回内国勧業博覧会案内記』考文社, 1903 <https://dl.ndl.go.jp/pid/801975>
『第五回内国勧業博覧会協賛会報告書』第五回内国勧業博覧会協賛会, 1903 <https://dl.ndl.go.jp/pid/801985>
田中貞三郎 編『明治三十六年博覧会之菜：附・近畿名勝案内』神戸新聞社, 1903 <https://dl.ndl.go.jp/pid/802011>
『活動画報』第3巻第4号, 正光社, 1919.4 <https://dl.ndl.go.jp/pid/7949955>
少女座編集室 [編]『少女座』第5号, 少女座編集室, 1987.9 <Z23-539>
横田順弥「明治時代は謎だらけ! SF作家としての永代静雄」『日本古書通信』第61巻第7号(通号804), 日本古書通信社, 1996.7 <Z21-160>
R.G. グラント 著 ほか『世界航空機文化図鑑 鳥人間からスペースシャトルまで』東洋書林, 2003 <NC111-H16>
大西小生『「アリス物語」「黒姫物語」とその周辺』ネガ!スタジオ, 2007 <KG582-J5>
吉田英雄「アルミニウム技術史 ジュラルミンから超々ジュラルミンまで(第1回)ジュラルミンとZeppelin飛行船」『UACJ technical reports』第4巻第1号, 2017, pp.101-111 <Z74-J564>
大西小生「永代静雄著作目録付、永代静雄の筆名について」『Mischmasch = ミッシュマツシュ : journal of the Lewis Carroll Society of Japan』第19号, 2017 <Z12-B159>
長山靖生『日本SF精神史』完全版 河出書房新社, 2018 <KG381-L159>

あらゆる人のために



JIS規格を広げながらウェブアクセシビリティに思いを巡らせている様子



2024年に新しく発行されたお札には、券種ごとに異なる位置に、インクが盛り上がった線がいくつか入っています。一万円札は左右の中央、五千円札は上下の中央、千円札は右上と左下です。これら「識別マーク」は、視覚によらず手触りだけでも券種が識別できるよう配慮されたものです。

このように、何かをデザインするときには、様々な利用者を想定した配慮が欠かせません。ウェブサービスにおいても同様で、誰もが情報やコンテンツを支障なく利用できるようにすること、またその到達度をウェブアクセシビリティ(WA)と呼び、その確保が求められています。

電子情報流通課標準化推進係では、当館のWAの確保に向け、様々な取組を行っています。毎年実施している、ウェブコンテンツのアクセシビリティ試験もその一つです。

試験では、当館のウェブコンテンツが、WAに関するJIS規格「高齢者・障害者等配慮設計指針―情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス―第3部：ウェブコンテンツ」(JIS X 8341-3:2016)の基準を満たしているか、専門の事業者が確認を行います。JIS X 8341-3:2016

では、写真やイラストには内容を説明する代替テキストを付与する、キーボード操作だけで全てのサービスにアクセスできるようにする等、ウェブコンテンツが満たすべき達成基準が、全部で61項目定められています。試験の結果を受け、基準に不適合となっている箇所の修正や、今後の対応計画の策定などを行い、WAの確保に努めます。また、一度基準を達成した後も、ウェブコンテンツは日々更新されるため、日頃からツールや目視によるチェックも欠かせません。

なお、基になった国際規格の改訂に伴い、JIS X 8341-3:2016には、近い将来、新たに26の達成基準が追加されることが予定されています。この中には「コンテンツがデバイスの向きに関係なく表示・操作できるようにする」といった、スマートフォンでの利用を想定したものもあります。

ウェブで使われる技術は日々進歩しており、ウェブの利用方法も時代と共に変わっていくため、WAの取組には終わりがありません。誰もが当館のウェブサービスを支障なく利用できるよう、WAを維持・向上していくために、地道な努力を継続していきたいと思っています。

(電子情報流通課標準化推進係 ドリマー)

資料探索のこれまでとこれから ～近現代政治史の資料をめぐって～

国立国会図書館は創設以来、政治家の文書（憲政資料）の収集を続けてきました。
当館資料も存分に活用しながら日本政治史の研究を続けてきた研究者に、日本政治を
めぐる資料の利用環境の変化について語り合っていました。

2024年9月20日国立国会図書館において対談実施（文責：本誌編集担当）



前田

亮介（まえだ・りょうすけ）

東京大学大学院総合文化研究科准教授

一九八五年、東京都生まれ。二〇一三年、東京大学大学院人文社会学系研究科博士課程修了。二〇一四年から北海道大学大学院法学研究科准教授、二〇一八年から二〇一九年にかけてプリンストン大学東アジア学部客員研究員。二〇二四年一〇月から東京大学大学院総合文化研究科准教授。博士（文学）。

著書に『全国政治の始動 帝国議会開設後の明治国家』（東京大学出版会、二〇一六年）、編著書に『戦後日本の学知と想像力 〈政治学を読み破った〉』先に』（吉田書店、二〇二二年）、『吉野作造政治史講義 矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』（吉野作造講義録研究会編、岩波書店、二〇一六年）等がある。専門は日本政治外交史、史学史。



季武

嘉也（すえたけ・よしや）

国立国会図書館客員調査員
創価大学文学部教授

一九五四年、東京都生まれ。一九八五年、東京大学大学院人文科学研究所博士課程単位取得退学。東京大学文学部助手を経て一九九九年から創価大学文学部教授。二〇一〇年から当館客員調査員。博士（文学）。著書に『大正期の政治構造』（吉川弘文館、一九九八年）、『選挙違反の歴史ウラからみた日本の一〇〇年』（吉川弘文館、二〇〇七年）、『戦前日本の選挙と政党』（吉川弘文館、二〇二五年二月刊行予定）、編著書に、『日記で読む近現代日本政治史』（黒沢文貴と共編、ミネルヴァ書房、二〇一七年）、『近現代日本人物史料情報辞典』（伊藤隆と共編、全四巻、吉川弘文館、二〇〇四～二〇一一年）等がある。専門は日本近現代政治史。

50年前の憲政資料室

前田 季武先生が国立国会図書館憲政資料室に初めていらっしゃったのはいつごろでしょうか？

季武 50年前、大学の学部3年生、20才のときでした。文学部に所属して、日本近代史を専攻していました。ゼミの成田賢太郎さんという先輩大学院生が、古文書の読み方を教えてくれるというので初めて訪れました。歴史資料としてあまり使われていない重要な文書があるんだったら積極的に読まないと勿体ないという意識が、自分としてもあったんじゃないかな、と思うのです。同じ時に御厨貴さん（政治学研究

者）、柴崎力栄さん（日本近代史研究者）、村瀬信一さん（同）も一緒に机を並べて勉強しました。はじめは「拝啓」の「拝」の字も読めませんでした。

前田 65年ほど前から利用していて、憲政資料室の資料収集にも中核的な役割を果たすことになる伊藤隆先生（日本近代史研究者）の「憲政資料室と私」という文章によると、伊藤先生が利用され始めた頃は、常連の方になじめず、また資料も今日ほど揃っていなかった

ので、自力での資料発掘を通じて憲政資料室に秘かに対抗していくような気持ちもあった、とあります（『みずず』276号、1983年8・9月号）。坂井雄吉先生（日本近代史研究者）も、初めての利用者には敷居が高い面があるという趣旨の発言を『国立国会図書館月報』誌上の座談会でなさっていますね（42号、1964年9月号）。当時は、どこか排他的なところがあったのでしょうか？

季武 確かに、その頃は閉鎖的なイメージがありました。学部生も大学院生も、指導教員の紹介状があって初めて資料が見せてもらえたわけで、来ている人もまばら。一日に、一組か二組くらいで、室員のかたものんびりしていたように思います。

『伊藤博文関係文書』の刊行

前田 その後、憲政資料室の伊藤博文関係文書の書簡を収録した『伊藤博文関係文書』（全9巻、塙書房、1973～1981）の出版が進みました。その作業にはかわられたのですか？

季武 ひと月に2回位、土曜日に憲政資料室に集まって書簡の読み合わせをしていました。終わったあとは、みなで近所の社会文化会館（当時社会党本部が入っていた建物）の喫茶室でお茶を飲んでから帰っていました。まだ学部生だった時の第7巻、第8巻にも協力者として名前を入れてもらい、最後の第9巻では、大学院生ながらも正式な編者として名前を加えてもらいました。とても嬉しかったですね。錚々たる先生方と名前が並ぶのですからね。

前田 社会文化会館をあえて選んだ理由はあったのでしょうか？

季武 他になかったから。このへんには、喫茶室みたいなのはなかった（笑）。

前田 消極的な理由ですね（笑）。

季武 『伊藤博文関係文書』が刊行されて、大学のゼミの学生の間で流行したのは年代推定の間違いを探すこと。「資料集として刊行されていても、そ



昭和55（1980）年頃の当館憲政資料室（閲覧室）「憲政資料室要覧」

んなに信用してはいけないものだな」というのを感じましたね。

前田 『伊藤博文関係文書』の年代推定は、精度は高い方だと思いますが……。

季武 それでも探すと見つかります。私自身も、同じような仕事に携わるようになってから、ミスはないようにしようという心がけているのですけれどもね。

前田 『伊藤博文関係文書』が出てから、研究が進んだという実感は抱かれましたか？

前田 亮介



季武 いわゆる政局史や政治家の研究という意味ではすごくインパクトがあったと思います。あれだけの分量はそうはないですし、伊藤はずっと明治政府の中心にいた人物ですので、どこから読んでも面白いと思いました。

大久保利謙の「史学統一」と「基礎工作」

前田 憲政資料室の歴史を振り返ると、大久保利謙先生（日本近代史研究者・元国立国会図書館職員）が1949年から非常勤で資料収集にかかわって、いわば資料室の人格的象徴になっていて。あちこちから人が集つ

てサロン風なところもあったとか。大久保先生の様子はもうでしたか？

季武 大久保先生は資料室につながる事務エリアの一番奥におられて。いつもお客さんが絶えなかったイメージがあります。次から次にいろんな人——研究者とか出版社の方々——がやって来て、ずいぶん仕事されているなあと思いました。ところで、前田さんは大久保先生についての論文を書かれていますね（「史学統一」の夢 戦前（一九三—一九四五）の大久保利謙『史苑』82（1）号、2022年3月号）。その中で使っている「史学統一」とか、「基礎工作」はどういう意味なのか、説明していただけますか？

前田 どちらも本人が使われている言葉なのです。「史学統一」というのは、部門別や地域別に史学を分断するのではなく、諸史学を統一、総合して捉えるという考えです。根底にあるのは、政治的に対立する歴史観や方法的に異質なアプローチの間でも連帯が可能だという大正リベラリストの精神だと思っています。歴史家の大同団結運動ですね。実際、大久保先生の時代の流行の変化はめまぐるしく、1920年代に文化史が流行りますが世界恐慌期はマルクス主義史学が強まり第二次世界大

戦後に全盛期を迎え、しかし1960年代にその批判（近代化論や政治過程論）も台頭する。ただ、大久保先生は貴族的というか、それぞれに絶対的な対立を見出さない。みんな違ってみんないいと万物を包容する。実際、多様な政治的立場の歴史家に敬愛されますし、大久保先生は史学史上で不思議な存在です。この大久保史学のつかみどころのなさが現れているのが「基礎工作」です。傍証はないですが、私の論文では「基礎」と「工作」に対抗的なニュアンスを込めていたとの推測を記しました。「基礎」は根本資料を確実に収集すること、「工作」は各歴史家の主観と責任でそれを解釈し叙述すること。いわば静と動の組み合わせです。

季武 大久保先生が資料収集や編纂にかかわったのは、「基礎」の部分なんですね。

デジタルコレクションの登場

季武 そうなると、今、我々がやるべき「基礎」はなんなんだろう？ と、考えてみたくなります。国立国会図書館のデジタルコレクション、これによって革命的に研究が変わったんじゃないかという気はしています。

前田 劇的な変化ですね。デジタルコ

レクションで東京に來なくても資料が収集できるので、地方と中央の格差が、相対的には減少してきた。

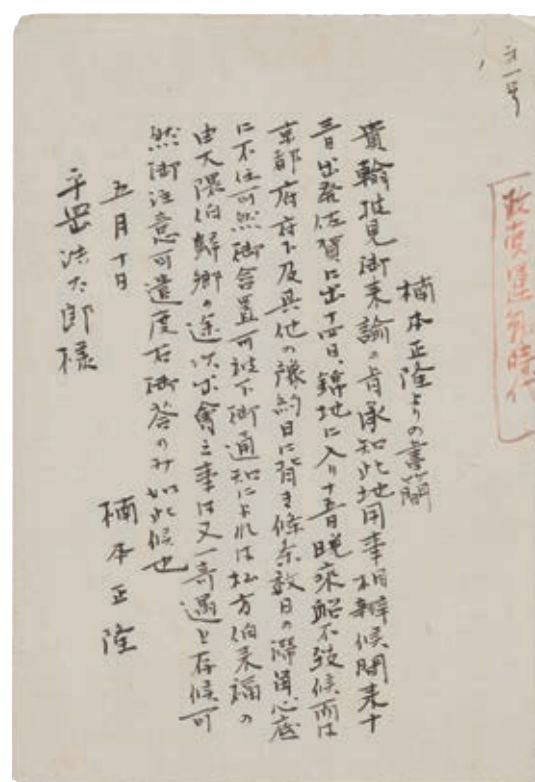
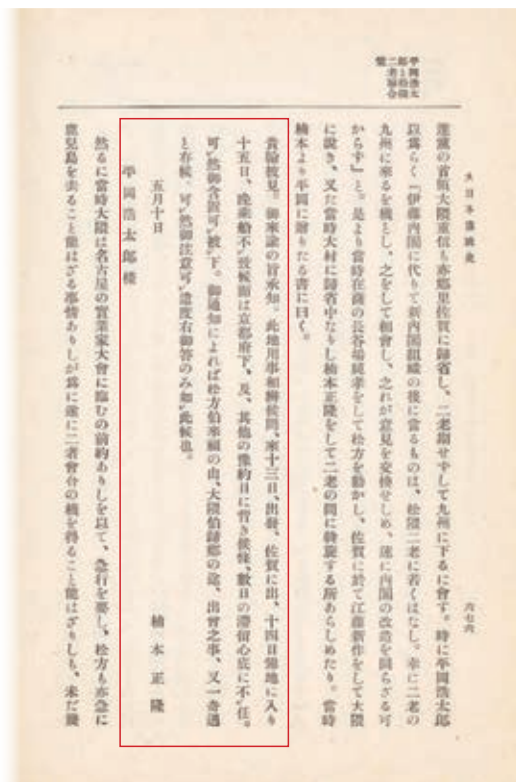
季武 残念ながら悉皆的に調べる、とはいかないけれど。

前田 悉皆とはいかないですね。また、デジタル化されていない資料や館内閲覧限定のデジタル化資料が不当に軽視されるリスクもあります。

季武 ネット上にのっていない本や論文が、今まで以上に軽視されてしまうかもしれませんね。最近ではデジタルコレクションで本の中身のフルテキストサーチも出来ますが、資料の一言一句が検索できると仮定すると、どんな研究がでてくるんだろう。

前田 一つは思想的な方向でしょう。思想家の全集などから、特定の言葉や概念の用例の変遷を過去にない密度で調べることもできます。また、帝国議会会議録検索システムで全文検索が可能になりましたので、計量テキスト分析とのジョイントも進むかもしれません。若い人にとって学術誌に載る密度のものを書きやすい時代になったと思います。見なければならぬ資料がとにかく増えてしまう大変な時代でもあります。

季武 デジタルコレクションだけでも



(右)楠本正隆書簡(写) 平岡浩太郎宛 [明治29(1896)年]5月10日付 平岡浩太郎関係文書100 当館憲政資料室所蔵名古屋に行かなければならなかった大隈重信と鹿兒島に滞在していた松方正義が、楠本正隆(衆議院議長)や平岡浩太郎の斡旋もあって、京都で面会できるようになったことを伝える書簡。京都での大隈と松方の意見交換が、明治29(1896)年9月の第2次松方内閣(いわゆる松隈内閣)の成立や、ひいては明治31(1898)年6月の第1次大隈内閣(いわゆる隈板内閣)誕生の遠因となった。

(左)大津淳一郎『大日本憲政史』第4巻(宝文館, 1927)に掲載された楠本正隆書簡の翻刻。
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879481/1/372>

見切れない、という嘆きの声もよく聞きますよね。どうだろう、いま、自分の研究テーマを決めたとして、その全ての資料を読むことはできますか？

前田 全ての資料を読むことができる。と自分で思える範囲のテーマにまずはすべきかと。でも、前は「全て」だと思っていたのに、時間が経ったら急に資料が増えたりすることもある……。

季武 見るべきものが増えてしまうとすれば、それを見やすくする手段も、「基礎」なのか。

前田 それも令和の「基礎」の課題に思います。確かに膨大な資料を使いこなせれば、優れた卒論、修論は書けるでしょうが、使いこなすのが大変ですね。昔の人がした苦勞をする必要は全くないのですが、今の若い人がデジタル世代とはいえ、デジタル化資料を使いこなす固有のリテラシー、方法論は、ある程度、大学研究室などで共有した方がよいでしょう。宝の山ですが、集合知のようなものがないとうまくそこにたどり着けない気がします。

季武 たしかに。

前田 刊行がデジタルコレクションの前か後かで研究の評価も変わってくると思います。デジタルコレクションがない時期にこれだけ調べあげてすごい

というのはありますし、先人の密度の高さに今気づかされることも少なくないですね。

季武 そういう意味でいうと、デジタルコレクション以前では、自分で資料を集めた伊藤隆さん(『昭和初期政治史研究 ロンドン海軍軍縮問題をめぐる諸政治集団の対抗と提携』東京大学出版会、1969)や、多方面の資料を博搜した北岡伸一さん(『日本陸軍と大陸政策 1906-1918年』東京大学出版会、1978)や御厨貴さん(『明治国家形成と地方経営 1881-1890年』東京大学出版会、1980)は、すごいなあ。非常に広く見ている上に、密度がある。北岡さんの本には最後に解題のついたビブリオグラフィがありますものね。

前田 ちょうど憲政資料室などで新しい根本資料が公開された時期だというのが重なって、後進が容易に乗り越えがたい高みであり続けています。

旧知の文献の再発見

季武 最近ちょっと面白い経験をしました。憲政資料室所蔵の平岡浩太郎(福岡県の代議士 1851-1906)の関係文書を室員の方と一緒に文字起こしの作業をしているのですよ。その

『大日本憲政史』と大津淳一郎

『大日本憲政史』（全10巻、宝文館、1927-1928）は、慶応3（1867）年の大政奉還から大正時代の終わりまでの政治史をまとめた本。立憲政治の成立と推移を詳述し、政治家の旧蔵文書や書簡などを数多く引用している。著者の大津淳一郎は、自由民権運動に携わり、明治14（1881）年に『茨城日日新聞』を創刊した。茨城県会議員を務めた後、明治23（1890）年の第1回衆議院議員総選挙に当選（その後、通算13回当選）。昭和2（1927）年、貴族院勅撰議員。



大津淳一郎（1857-1932）
肖像写真の出典：報知新聞社通信部編『名士の少年時代 新人国記 関東篇』平凡社、1930
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1224552/1/191>



表紙



扉

大津淳一郎『大日本憲政史』第1巻、宝文館、1927
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879425>

中に憲政党の結成につながる面白い書簡があったのですが、「すごい！」「こんな新史料あるんだ！」と思って調べたら、デジタルコレクションでヒットして、大津淳一郎（茨城県の代議士1857-1932）の『大日本憲政史』第4巻（宝文館、1927）に既に引用されていた。それにむしろ驚きました。デジタルコレクションを通じて『大日本憲政史』の奥深さにいまいちど気付いたということになります。

前田 私も、くずし字で読めない字があったときに、デジタルコレクションで検索したら既に『伊藤博文秘録』（春秋社、1929-1930）という資料集の中で翻刻されていて、それで字が読めたということがありました（笑）。戦前の著作や伝記で翻刻されていた書簡は、戦後のポピュラーな資料集から漏れていると忘れがちですね。

季武 確かに。

前田 私のお世話になった先生から、研究の世界に入ったとき、最初に『大日本憲政史』を読んで研究テーマを探すように指導されたというお話を伺ったことがあります。仰ったような「奥深さ」とかわりそうですが、古典的な研究書ではなくそこから入るのかという驚きがありました。

季武 確かに基本は民権論ですが、正確さと詳細さをめざして史料を収集し、さまざまな角度から史料に語らせるといふスタイルですね。升味準之輔さん（政治学研究者）の『日本政党史論』（全7巻、東京大学出版会、1965-1980）に近いですね。どちらも饒舌な点も。

前田 『大日本憲政史』のような古典がデジタルで見られるようになったのは良いことだと思うのです。ただ、デジタルコレクションで出てくる昔の本には、記述の信用度が低いものや、好事家的な情報しか出てこないものもある。資料の海に溺れて周辺情報ばかりが増え、優先順位の感覚がマヒするのは、現代の歴史研究が陥りやすい罠でしょう。紙かデジタルかを問わず、根本資料から読む必要は当面変わらないかもしれません。未知の情報の魅力に攪乱されず、自らの優先順位を主体的に保つことが大事だと思います。

戦前の選挙の資料

前田 季武先生は大正期の政治史をご専門とされ、特に第2次大隈内閣期（1914年4月-1916年10月）の政治史の研究から出発されました。最初のご論文の表題にも「政党と元老」

とありますが（第二次大隈内閣における政党と元老」『史学雑誌』91（6）、1982年6月号）、どちらかというと、民主化の担い手たる政党より、これに直面した国家建設者（元老 藩閥）の意外な存在感に叙述のウェイトがありだったように思います。その後、選挙の研究を1990年代に発表されるのですが、なぜ選挙にご関心を持たれたのでしょうか？

季武 近現代史を勉強する上で、国家の仕組みを研究することは大事。ですが、国民をどうとらえるか。これをずっと考えていました。それこそ戦後歴史学では、国家史、民衆史がそれぞれ独立して進んでいるところもありました。国家と国民の接点を探れないか、かといって国民一人一人をつかまえるのは無理だ、どうやったらできるんだろうか。そうした中で、三谷太一郎『日本政党政治の形成 原敬の政治指導の展開』（東京大学出版会、1967）の中に引用されていたのですが、美濃部達吉（憲法学者）の、一番自然な社会の団結は地方的な団結だ（『現行選挙法を非難す（四）』『読売新聞』1912年3月8日）、という一節を読んで、村というのを一つの単位で考えられるのではないか。江戸時代の村

請制じゃないが、個人とまではいかなくとも、村単位である程度は国民レベルも分かるんじゃないか。村での選挙では、選挙権のない若者たちまでお祭り騒ぎをしていることがあった。選挙を通じて、下のレベルの動きも見たいという考えでした。

前田 なるほど。

季武 その後、私とほぼ同世代の山室恭子さん（日本中世史研究者）が『中世のなかに生まれた近世』（吉川弘文館、1991）という本を書き、非常にインパクトがありました。史料の分析にパソコンを駆使していて、歴史研究の実証とは何かということを考えさせられたのです。

前田 先生は村を「ムラ」と表記されるのが印象的ですが、この概念を選んだ理由がありますか？

季武 勝俣鎮夫さん（日本中世史研究者）の岩波新書『一揆』（岩波書店、1982）が面白かったからです。村というものが近世の中にできてくる。その村があまり変わらないで、ずっと高度成長期まで来ているようで。その後、柳田國男（民俗学者）の『明治大正史 世相篇』を読み直して、17世紀頃から村が定着するようになり、その生活ぶりが明治時代になってもずいぶ

ん引きつがれているなと感じました。そのへんをもう少しちゃんと理解しないと、思って村に注目するようになりました。

前田 季武先生の一連の大正政治史は、1980年代の佐藤誠三郎先生（政治学研究者）の自民党研究からインスピレーションを得ていたのではと推測していたのですが、中世史や民俗学からの影響は盲点でした。あわせて、地方にある選挙の資料に着眼された経緯も教えてください。今でこそ憲政資料室は浅沼稻次郎（東京都の代議士、1898～1960）など政党人の資料が戦後まで集まっていますが、40年近く前となると、河野広中（福島県の代議士、1849～1923）や佐々友房（熊本県の代議士、1854～1906）の資料はあるものの、藩閥の資料が中心で、政党はまだまだだったように思います。選挙や政党に研究の重点を移される中で、東京を拠点とする資料収集に限界を感じられて、といった事情もあったのでしょうか？

季武 そんなにしっかり考えていたわけではないですが、当時、憲政資料室の資料は今と比べれば圧倒的に少なく、大学院生のうちに、関心のあるのはおおむね見終わってしまったので

す。大学院生時代は時間も十分にありましたので、最低週3日は来て、朝9時半から閉室時間まで必死に史料を筆写していました。目標としては1日で400字詰原稿用紙を40枚埋めようと思っていました。それが達成された日はとても充実感がありましたね。それでも当然のことながら、これも知りた

い、あれも知りたいというふうになって、どんどん広がっていったというところが正直なところですよ。と同時に、その頃、日本全国で近代資料が随分充実してきたように思います。各地でそれぞれの地域の公文書もだんだんに公開されてきましたけれども、自治体史が出て来て、編纂するために資料が収集され、それがたまって県立の図書館なり文書館なりに行くのだと思いますけれど。では、全国を歩いてみるかというので回ってみました。選挙の数字集めだけじゃもったいないから、回って、面白い資料も見えていくというところを1980年代、30代の前半位にやっていましたね。

全国での資料調査

前田 どのくらい回られましたか？『選挙違反の歴史 ウラからみた日本の100年』（吉川弘文館、2007）

のあとがきでも、まさに80年代から普及し始めたばかりのパソコンを持って全国を飛び回ったと記されていましたね。

季武 全都道府県。おおむね山室建徳さん（日本近代史研究者）と二人で一緒に。都合がつかないときは単独で行くことになりましたが。戦前の大選挙区時代（1902～1917）は、選挙の地域別の数字が分かる資料は体系的には残っていないので、その地域の県庁文書が新聞を見ないと分からなかった。川人貞史さん（政治学研究者）の『日本の政党政治1890～1937年 議会分析と選挙の数量分析』（東京大学出版会、1992）が出て、だいぶ見晴らしは良くなりましたが。

前田 特に注目していた地方はありませんでしたか？

季武 一番驚いたのは宮崎県庁文書でした。明治期の生々しい村の生活が手にとるように浮かぶのです。ただ、当時は、それをいかにすれば論文になるのか、全く見通しがつきませんでした。単に面白いというのではなく、面白さをどう表現したら分かってもらえるかと。実はこの宮崎県庁文書を紹介してくれたのは、当時九州大学助教授だった有馬さん（日本近代史研究者）で

した。また、有馬さんは福岡県史を編纂していて、ついでに資料の整理を手伝ってくれないか、ということ、毎年8月の夏休みに村瀬信一さんと一緒に福岡に1週間行って、福岡県地域史研究所というところで資料整理をしていました。この時整理していたのは、永江純一（福岡県の代議士 1853～1917）という立憲政友会幹事長の資料で、地方有力者たちの赤裸々な政治的駆け引きが詳細に記されており、特に選挙での巧妙な作戦が面白いものでした。そうそう、新潟では、『雪月花 西潟為蔵回顧録』（野島出版、1974）掲載の西潟為蔵（新潟県の代議士 1845～1924）の日記も面白かったですね。



西潟為蔵『雪月花 西潟為蔵回顧録』本間恂一・溝口敏彦編、野島出版、1974 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12189776>

前田 福岡県史の縁で、ますます集中的に選挙の資料を見るようになったのですか？

季武 そうですね。永江純一や野田卯太郎（福岡県の代議士 1853～1927）の資料を見ているうちに、選挙は面白い！と感じました。大選挙区時代の福岡県は見事に立憲政友会の代議士同士の間で地盤協定ができるんですね⁽³⁾。こんなに綺麗にできるものかというのが不思議で、これは全国的に言えるのだろうかという疑問を持ったのです。そこで、いつそのこと全国的に調べてみるかと。

前田 地方での政情や選挙事情は地方新聞に頼ることも多いと思います。野田や永江クラスの魅力的な個人文書に毎回めぐりあえると一番良いのでしょうが、それは難しいので、やはり新聞だけだと、隔靴搔痒なところもあるのでしょうか？

季武 第一次世界大戦後になりますと地方新聞がいっぱい出てきて、私の場合は秋田県で経験したんですが、新聞だけでもかなり追えるという感じはありました。危うい点もあるが、他の地域との比較をしながらやっていけばかなり使えるという気がする。

前田 それは、府県ごとに複数、党派

的な新聞が分かれているからでしょうか？

季武 党派というより、一候補者が一新聞を持っているという感じでした。それらが地域の図書館や公民館にありました。この出会いはもしかしたら僥倖だったのかもしれませんが、私の印象では他の地域でも同じように残っているのではないかと。それは個人宅かもしれませんが。いずれにしても、歴史専攻の人間には足で稼ぐことが好きな人は多いでしょうね。

前田 一候補一新聞とはすごい。戦前は、新聞が政党との関係で党派化・系列化されていますよね。

季武 1906年創刊の名古屋新聞という新聞があります。最も憲政会に近い新聞で普選論の急先鋒でした。政党内閣時代は立憲民政党支持でいくのですが、満洲事変以降になると、最も強硬な対外論を展開するようになります。

前田 面白いですね。

季武 おそらく党派というより新聞経営との関係が深そうですね。

前田 名古屋新聞からすると、あえて政党を前に出すメリットがなくなっただけでしょうかね。政治史では、政党を系列メディアに対する操作の主体とし



淡路文化史料館外観

(写真提供: 淡路文化史料館)

て見がちです。でも、メディアは客体ではなくて、新聞社には新聞社側の自律性や戦略性がある。戦前の政党と複数の地方新聞との関係は面白いですね。それが分かる資料の発掘も研究もこれから進んでいくとよいですね。

実は、最近では明治政党史の小リバイバルが起きていて、若い方々が私の院生時代には考えられなかったくらい全国の文書館を精力的に回っていて、兵庫県洲本市の淡路文化史料館の高津家文書（高津雅雄（兵庫県の代議士1855～1933）の個人文書）が注目を集めていたりします。野田や永江の資料にも、今後新しい世代の研究者から新しい光が当てられそうです。

季武 香川県坂出市の鎌田共済会郷土博物館の鎌田勝太郎（香川の実業家貴族院議員 1864～1942）の文書も面白いですよ。

都市部と郡部における政党化

前田 政党といえば、明治後期から大正・昭和初期にかけての選挙における政党化の程度をどう理解したらいいの

かというのは私の中でずっと課題です。季武先生は、明治期は民党の支持基盤である「名望家」（地主、地方企業の資本家として政党地方支部を支えた人々）がムラをおさえ、この名望家

たちの全国的な連合が1890年代の最初期の総選挙で築かれ、その全国連合の上に自由党系、改進黨系の二大民

党勢力が乗ったというイメージを提起されてきました。ただ、20世紀、この大正期の民主化の時代に入ると、政党の地域社会への浸透がより組織的に進む印象があり、逆にこれと対抗する官僚や反政党勢力の側も国民を組織化しようと努めます。政党化の動きと反政党化の動きとがせめぎあって地域社会が大きく変動していくともいえますが、この大正期以降の政党化をどのように理解しておられるでしょうか。

季武 私の理解では、郡部——特に

農村——はおおむね政党化が順調にいったのかなという感じがします。原敬（第19代内閣総理大臣 1856～1921）の指導下の立憲政友会は、大選挙区の時代になりますと、名望家が政党側のチャンネルも反政党側のチャンネルも個人として受け止めていたように思うのです。

前田 それから、都市部では別の磁場が働いていて、郡部で立憲政友会が築いたような地盤協定のテクニックが使えない。都市の有権者もグリップできないから既成政党以外の候補者が当選するということがありますよね。

季武 面白いものがありますね。この写真（次頁）は1915年の総選挙の日の東京市神田の投票所付近の写真でして、各候補者が休憩所と称して自分に投票してくれた有権者をここで接待するんです。なかなかの熱気ですよ。

実は、都市というのは江戸時代以来の伝統が強い郡部とは違うというところがありますね。大正前期の第2次大隈重信内閣（1914年4月～1916年10月）、寺内正毅内閣（1916年10月～1918年9月）のときに、都市では、それまで鳴りをひそめていた吏党勢力が多くなるという現象があります。吏党は民党とは反対に藩閥官

僚を支持する議員たちが構成する政

党でして、なぜこの時期に急速に増加したのか、どういう人たちがなんだろうと思って調べてみたら、事業を広域に展開している実業家だとか、海外の植民地や貿易で活躍しているような人が多いというのが見えてきたんです。そういう人たちが都市での選挙の攪乱要因として突然出てくるんですね。時間をかけて出馬の準備をしてから出てくるのではなく、降ってわいたように出てきて当選してしまう、これは何

なんだろうという風に思っていました。考えてみると、こうした人材は原敬、その前の伊藤博文（初代・5代・7代・10代内閣総理大臣 1841～1909）という立憲政友会総裁が欲

しがった人材でもあるわけですよ。もっとも、第一次世界大戦後には彼らは二大政党に入っていきます。逆にいえば、二大政党が欲しがっていた人材が第一次世界大戦前では吏党にいた訳で、吏党の方が先進的だったのですね。

前田 なるほど。

季武 第一次世界大戦後に名望家が衰えていくと、選挙も大衆化していきます。第一次世界大戦後は、組織化の時代。民間はもちろん、政党でもたくさんサブ組織を作って国民を再編成しよ



第12回衆議院議員総選挙投票日当日(大正4(1915)年3月25日)の東京市神田の投票所付近。各候補者の休憩所が設置されており、古島一雄、鳩山一郎、三木武吉らの名前が見える。『歴史写真』1915年5月号 <https://dl.ndl.go.jp/pid/966214/1/22>

うということなんですか。政党も官僚も混ぜこぜに入っているような組織ができる。地域分断的な形でできていく個人後援会もその流れなのかなというイメージです。個人後援会といえ、憲政資料室にある坊秀男(和歌山県の代議士 1904-1990)の関係文書ですとか、その実態が分かる資料がだんだん出てきてはいるけれども、もっと本格的に研究する余地があるかとは思っています。

前田 多元的な組織化の時代という視点で自民政権まで見通せるのですね。名望家の全国的連合と、個人後援会の地域分断性のコントラストも、大変興味深く伺いました。男子普選や戦後改革の作用と併せて、混ぜこぜの組織化のダイナミズムに関する本格的な研究が出てきてほしいですね。

北海道の現代史資料

季武 前田さんは北海道150年史関連の自治体史編纂もしているそうですが、北海道の資料の残り具合はどうですか？

前田 北海道の政治史研究には19世紀中心の面があったように思っています。現代史研究は手薄でした。そのため戦後史全般、特に保守政治家の資料

がまだ十分整理されていません。ただ、米国札幌領事館関係の資料が米国立公文書館(NARA)にあって、その一部を憲政資料室でも複製として収集していると思いますが、米国側は保守系と多く接触するので、そういうのを読むと町村金五(北海道の代議士・知事 1900-1992)の発言も出てくる。保守系は、まだ米国側の資料で補わざるをえないところがありそうです。逆に革新系は比較的残りが良く

て、たとえば北海道労働資料センターには、各党の選挙戦術の分析、さらに社会党と公明党の協力交渉経緯を記した資料も入っています。これらは山崎幹根先生(行政学研究者)とご一緒に編纂した3月刊行予定の『北海道現代史 資料編1(政治・行政)』に載せましたけれど。ただ、農民運動、労働運動に比べると革新系もまだこれからで、道外の文書館にだいぶ頼らざるをえませんでした。

季武 これからでしょうか。おそらく、まだあまり資料が出ていない気がしますね。

前田 冷戦期の北海道は東西対立の影響を受ける前線なので、米・ソ連・韓国の領事館の動きが見えますし、北方領土返還運動と沖縄返還運動の関

りなどもあつて。戦後の北海道は政治外交史的に未知の主題が多くて面白いなと思います。

資料情報の整理と共有

季武 先ほど話に出た兵庫県の洲本市といえば、私も永田秀次郎（兵庫県出身 東京市長・貴族院議員 1876～1943）の旧蔵文書について、永田家で調査を行わせていただいたことがあるのですが、その一部は国立国会図書館憲政資料室に寄贈されました。残すという意味でいうと、機関に最終的に寄贈していただくという傾向が一般的に強くなってきたとは思いますが、問題は、資料情報ネットワークで、以前は『全国特殊コレクション要覧』（国立国会図書館、1957年、1977年改訂版）があつたので便利だったのだけど……。レファレンス協同データベース（国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築しているレファレンス（調べものの相談）のデータベース）に特別コレクションを紹介するページはありますが、入っているのは一部ですね。ジャパンサーチ（デジタルアーカイブの多様なコンテンツを横断的に探せるサイト）は歴史的文書の中身を細かく調べるものとも違い

ますし。

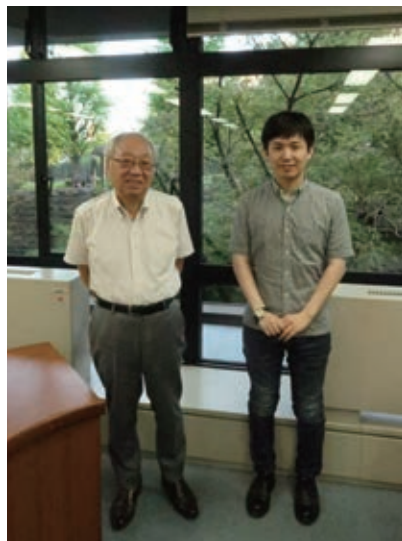
前田 機関に寄贈していただく傾向が強まっているのは朗報ですね。また最近、専門の図書館がたたまれてしまったり、自治体史編纂事業が終わったりすると、資料が分散することもあります。そのへんの所蔵先のアップデートも必要になるので、資料情報ネットワークの構築を本当にやろうとすると、結構な労力にはなると思いますし、現状は詳しい人に聞くという形になっています。ただアーカイブの一覧が整理されると利用者や引用者も増えるでしょうし、ひいてはそのアーカイブの存続に多少貢献できるかもしれません。私も資料調査のたびに、予算や人員の制約のもとでも、誇りを持って、資料をできる限り良い状態で保管してくださっている地域文書館・図書館の方々の努力に研究が支えられていることを実感します。今は検索もしやすいから、誰かが使い始めると、わあつとそのアーカイブに若手研究者が集まることなんかもありますよね。

季武 アツという間に資料情報が増えているので、これをフォローするのが大変で。調べる上での羅針盤みたいなものを示す仕事を誰かがしなければならぬのですがね。

前田 米国の文書館ガイドが何冊か出ていますが、誰かが日本史版を本にしてくれるとよいですね。今このテーマでは、最低限これくらい読まなきゃ、調べなきゃいけないと。季武先生と伊藤隆先生が編者になられた『近現代日本人物史料情報辞典』（全4巻、吉川弘文館、2004～2011）が金字塔ですが。このように情報が共有されやすくなると、研究も地理的な懸隔を越えて連鎖していきますよね。ちょうど将棋の世界でも、ネット将棋とAIの発展で地域差が狭まり、どこに住んでいても強い少年少女が前より台頭しやすくなったようです。私はデジタル世代とアナログ世代のはざまにある渡辺明九段とちょうど同世代なのですが、「細い攻めをつなぐ」天才である渡辺九段の、アナログ時代にはなかった膨大な情報量を適切に取捨する能力に対して、ライバルの羽生善治九段が敬意を示していたのが印象に残っています。

季武 あなたも相当将棋が好きだね。

前田 まあ観る専門ではありますが（笑）。



（注）

- 1 座談会参加者は、宇野俊一、大山梓、坂井雄吉、西田長寿、山辺健太郎、藤井貞文、田山茂、大久保利謙〔司会〕。「憲政資料ノート（10）座談会 憲政資料室の資料をめぐる」『国立国会図書館月報』42, 1964.9, pp.21-25 <当館請求記号 Z21-146>
- 2 詳細は、季武嘉也『大正期の政治構造』吉川弘文館、1998, p.46（注16）を参照。<当館請求記号 GB461-G6>
- 3 詳細は、有馬学・季武嘉也「戦前におけるいわゆる大選挙区制と政党支部第一二、一三回総選挙における福岡県政友会の動向を中心に一」『福岡県史』近代研究編 各論（二）、福岡県、1996, pp.557-648 <当館請求記号 YQ5-140>

電子資料の長期保存 ABC ②

CD の長期保存



国立国会図書館は紙の資料だけでなく、CD、DVD、USB メモリといったパッケージ系電子出版物や、物理的な形のないインターネット上のデジタルデータ等も所蔵しています。このような電子資料の永続的な利用を保証するには、紙の資料とは異なる適切な長期保存のための取組が必要となります。

当館では、主に令和2年から令和5年にかけて、より劣化が懸念されるフロッピーディスク (FD) のマイグレーション作業に注力していました。FD の作業がほぼ終了したこともあり、令和5年度より、CD (Compact Disc) のマイグレーションに本格的に着手しました。

この記事では、当館における電子資料の長期保存の概要と FD のマイグレーションについて紹介した前回の記事 (「電子情報の長期保存 ABC」(730 号 (2022 年 2 月))) の続編として、CD 等を対象とした長期保存の取組について紹介します。

(電子情報部 電子情報企画課 次世代システム開発研究室 木下貴文)

当館での CD 等の所蔵状況

当館では令和 2 年度に、所蔵しているパッケージ系電子出版物の数量調査を行いました。その結果、CD、DVD、Blu-ray Disc といった光ディスク（CD 等）を約 87 万 3000 点所蔵しており、年間約 3 万 9000 点のペースで増加していることがわかりました。

その種類も、データ、書籍、統計、音声 CD、映像 DVD、アプリケーション、ゲーム等、多岐にわたります。

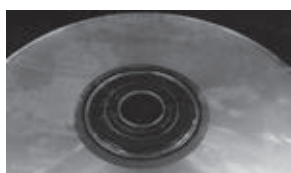


CD 等の長期保存における課題



物理的な破損

- ・軽微な汚れや一部の傷で CD 等全体が読み取れなくなることがある。



媒体の寿命

- ・CD 等の寿命は 10 年程度という説から 100 年以上という説まで様々。
- ・読取専用の CD 等と比べると、追記型、書換型の方が早く劣化するとされている。
- ・紙媒体の寿命よりは短いと考えておいた方が安全。



改ざんや上書き

- ・書換型の CD 等は、改ざんや上書きが容易。
- ・意図しない書き換えやデータ削除のリスクもあり、利用の際は注意が必要。



利用環境

- ・CD 等はまだ現役で使われるため、ドライブの入手等の問題は現時点ではない。
- ・データ用 CD 等は様々な OS、ソフトウェア、機器で用いられるため、記録されたデータを正しく利用するには、多種多様な環境を長期に維持する必要がある。

CD の特徴・種類

CD は現在まで広く用いられているデジタル記録媒体です。1980 年代前半にソニーとフィリップスによって音声記録専用に開発されたものがそのはじまりですが、その後さまざまな種類のものが作られています。

特徴

内周から外周に渦巻き状に記録します。容量は、データ記録であれば 650MB や 700MB 程度の物が、音声記録であれば 74 分や 80 分程度の物が一般的です。

形状

直径 12cm のものが最も一般的ですが、直径が 8cm のものもシングル CD として広く用いられました。その他、カード型など、特殊な形状をした CD も存在します。

音声用 / データ用

当初は音声記録専用でしたが、その後汎用的なデジタルデータ記録用として用いられるようになりました。1 枚の CD に音声とデータの両方を記録することも可能です。

書込の可 / 否

開発当初は読取専用（Read-Only）のもののみでしたが、その後、1 度だけ書き込みができる CD-R（Recordable：追記型）や、何度も書き換えられる CD-RW（ReWritable：書換型）が開発され、現在も広く用いられています。



Recordable
ReWritable

当館での CD の長期保存のための対策



媒体変換（マイグレーション）

- ・マイグレーション：デジタルデータをより安全な記録媒体に移すこと。CD 等からデータを取り出して別の媒体へと移すこと。
- ・令和 5 年度に、2000 年までに刊行された図書の付録 CD を中心とした約 1 万 5000 枚程度の CD をマイグレーションした。
- ・書換型であると判明した CD 等は優先的にマイグレーションしている。



利用環境の維持

- ・Windows XP 搭載 PC を閲覧用（印刷不可）に保有。
- ・Windows XP、Windows7 等の古い OS を入手し、仮想環境での動作の調査を実施。



保管

- ・温湿度が管理された書庫（22℃、湿度 55%）で保管

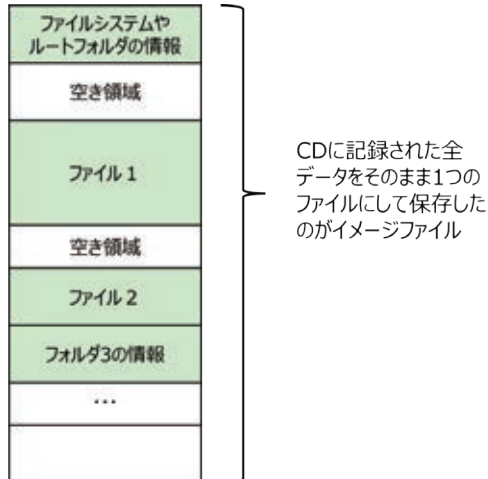
参考：当館のこれまでのマイグレーションの取組

媒体種別	所蔵数（令和2年度時点の概数）	令和5年度までの実施数
CD 等	約 870,000	約 15,000
書換型の CD 等	1,000	394
USB メモリ	600	547
MO	36	36
MD	1,177	144
FD	12,400	12,312

当館での CD のマイグレーション作業

データ用 CD

PC 等の端末で CD 内のファイルやフォルダをコピーする方法と、イメージファイルを作成する方法を、必要に応じて使い分けています。



※イメージファイルはCD1枚に記録されたデジタルデータを、空き領域や管理領域も含め最初から最後まで順番に読み出し、1つのファイルとして保存したもの（CDの場合はISOファイルと呼ばれることが多い）。

イメージファイルを別のCD-R等には書き戻せば、基本的に元のCDと同一のディスクが作成することができる。また、ほとんどの場合、イメージファイルから中のファイルを取り出すこともできる。

音声用 CD

記録された各トラック（例えば音楽CDの場合1曲に相当）を、そのままの音質でWAVEファイルとして取得しています。



※ WAVE ファイル（拡張子は WAV とすることが多い。）は音声データを非圧縮で保存する際に最もよく用いられるフォーマットの1つ

｜ マイグレーションしたデータは？ ｜

マイグレーションした資料のうち、技術的な制約がなく利用提供が可能なものについては、令和7年2月現在、主に「パッケージ系電子出版物」コレクションの資料として、順次国立国会図書館デジタルコレクションに登録し、館内限定で公開しています。



CD等は令和7年現在も日常的に用いられており、ドライブ等の利用環境の懸念等は比較的小さいものの、p.18で述べた課題に加え、膨大な所蔵量とそこからくるマイグレーション作業の効率化、適切な優先順位設定の必要性等、FDでは見られなかった課題も多くあります。

今後も、数十年、数百年後の未来の人たちにも現在の文化が伝えられるよう、日々の保存対策や技術調査を進めていきます。

本屋にない本



インキュナブラの時代
慶應義塾の西洋初期印刷本
コレクションとその広がり
第30回慶應義塾図書館貴重書展示会
安形麻理 監修
慶應義塾図書館 2018.10
107p ; 26 cm
<請求記号 UM31-L5>
表紙画像提供：慶應義塾図書館

いま私たちが手にしている本には、当たり前のごとく標題紙やページ番号がある。だが昔はなかった。活版印刷術の発明によって、本はその姿を変えたのだ。写本から今の本の姿へ移行する試行錯誤の日々、そこそが「インキュナブラの時代」であった。

そもそも「インキュナブラ」とは何か。和訳すると「ゆりかご本」。幼少期の本、つまり初期印刷本（15世紀にヨーロッパで金属活字により印刷されたもの）のことだ。

本書は、慶應義塾図書館のインキュナブラ・コレクションの展示会図録である。監修者の安形麻理氏は慶應義塾大学で書誌学の研究をしており、デジタル技術も活用しながら当時の印刷本

の形態や印刷の仕組みを解き明かしている。そんな安形氏をはじめとする研究者らが解説を加えた本書を読めば、インキュナブラが世界に与えた影響、広がりを感じることができる。

まず本書の序盤で紹介されるのが『42行聖書』。活版印刷術を発明したグーテンベルクが最初に印刷したとされ、42行2段組みであることからそう呼ばれている。現存するものは世界で48部しかない、貴重な書だ。この『42行聖書』は写本の伝統を受け継いでいるという。文章の冒頭のカラフルな装飾頭文字もその1つだ。写本の時代は文字や模様でページを埋め尽くし、色によって文章の区切りを示していた。そのためインキュナブラの多くは印刷

時に余白を残しておいて、わざわざ人の手で頭文字を描いていたそう。その後、白黒印刷の普及に伴って、色ではなく改行やインデントによって文章構造を表すようになったのだという。

また、紙の1枚ごとにフォリオ番号がつくようになったのもインキュナブラの時代だ。これが今のページ番号に発展していく。しかし本書収録の資料からは、一筋縄ではいかなかった様子うかがえる。というのも、目次はあるのに本文に番号が刷られておらず、手書きで書き足されている例、逆に本文には番号があるのに目次や索引で活用されていない例、番号が乱れている例など、さまざまな例が見られるのだ。印刷業者の努力が偲ばれる。

ほかにも多くの試行錯誤を経て、インキュナブラは変わっていった。その変化は直線的なものではなかったが、確実に今に繋がっている。例えば英数字の代表的なフォント「Times New Roman」も、インキュナブラの時代に開発された「ローマン体」が元になっているそう。本書の後半では、ローマン体の変遷を辿ることができる。

ちなみに当館もインキュナブラを15点所蔵している。「インキュナブラー西洋印刷術の黎明」という電子展示会も、当館HP上で見られる。印刷術や活字についてより詳しく学べるうえ、インキュナブラの魅力を実感できるので、ぜひ本書と併せてご覧いただきたい。

*電子展示会「インキュナブラー西洋印刷術の黎明」
<https://www.ndl.go.jp/incunabula/index.html>

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

『国立国会図書館月報』 読者アンケートの結果から

小誌では、良い誌面作りを目指し、6月25日（火）から12月5日（木）まで読者アンケートを実施し、191名の方々からご回答をいただきました。ここでは、アンケート結果の一部を紹介いたします。

皆様からいただいたご意見・ご感想は、今後の企画・誌面作りの参考にさせていただきます。ご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

表1：ご回答者のご職業・年齢分布

（単位：名）

	～10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	計
国会関係		1	2		1	1		5
図書館関係 （公共図書館）		11	14	20	13	5		63
図書館関係 （大学図書館）		1	9	13	11	8		42
図書館関係 （専門図書館）			2		3	2		7
会社員		1	3	3	7	5		19
公務員・団体職員 （教員除く）		1	1	4	6	2		14
教員			1		4	3	1	9
学生・大学院生	1	3			1			5
その他		1	2	3	3	15	3	27
計	1	19	34	43	49	41	4	191

表2：『月報』を読んだきっかけ

（単位：名）

	職場等に届いた ・ 職場等での回覧	図書館等で 見かけた	インターネット 等で調べものをしていて発見	X（旧 Twitter） で見た	友人・知人 からの紹介	その他
国会関係	3	2				
図書館関係 （公共図書館）	42	21				
図書館関係 （大学図書館）	27	13	1			1
図書館関係 （専門図書館）	3	2		1	1	
会社員	6	5	5	3		
公務員・団体職員 （教員除く）	7	4	3			
教員	2	3	3	1		
学生・大学院生		3	2			
その他	6	8	6	3	1	3
計	96	61	20	8	2	4

図書館関係者の方に伺いました—『月報』はどのように利用していますか？

『月報』は毎号、当館から各種図書館等に送付しています。それらをどのように利用しているか尋ねたところ、以下のような回答でした。

- ・利用者の利用に供している 43名
- ・業務上の参考資料として職場で回覧している 44名
- ・両方 23名

表 3：『月報』を読む媒体

(単位：名)

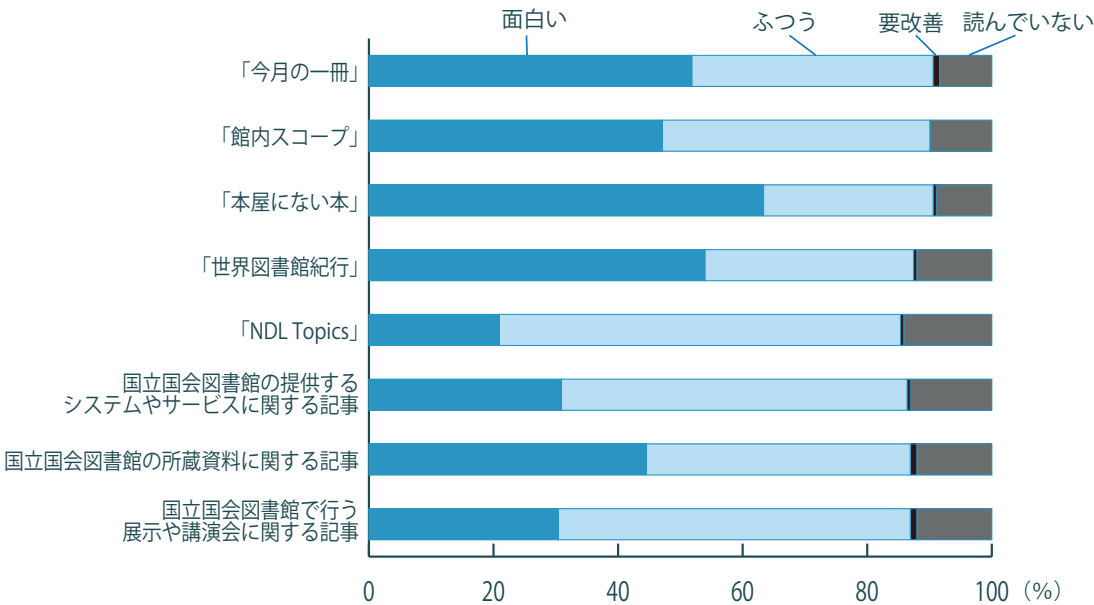
	冊子体	PDF ファイル	両方
国会関係	1	1	3
図書館関係 (公共図書館)	60	1	2
図書館関係 (大学図書館)	31	3	8
図書館関係 (専門図書館)	5	2	
会社員	10	7	2
公務員・団体職員 (教員除く)	9	5	
教員	2	7	
学生・大学院生		2	3
その他	11	14	2
計	129	42	20

表 4：『月報』の記事をどの程度読むか

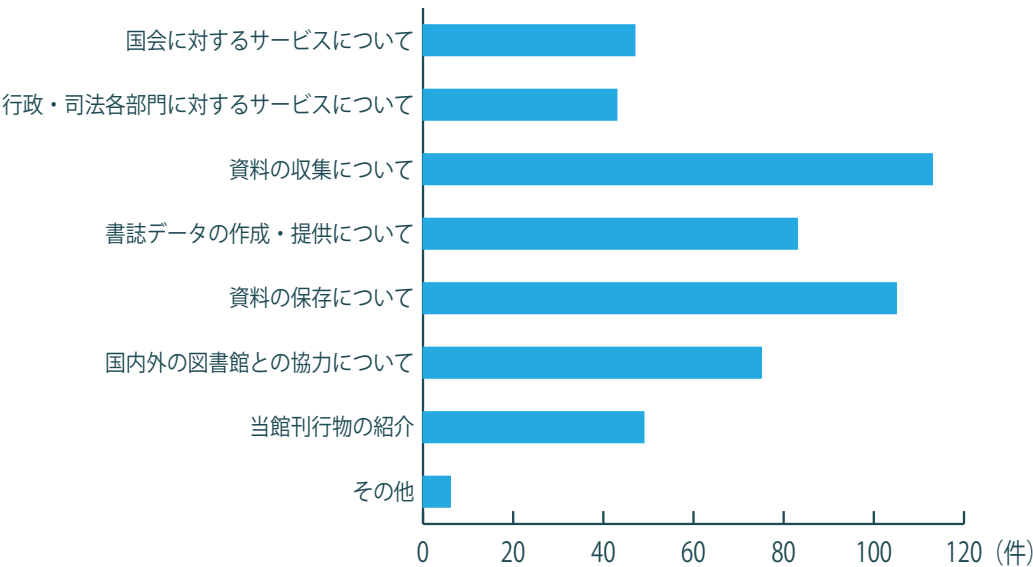
(単位：名)

	ほとんど 全て	興味のある 記事だけ	目次だけ	その他
国会関係	2	3		
図書館関係 (公共図書館)	13	47	3	
図書館関係 (大学図書館)	16	22	4	
図書館関係 (専門図書館)	3	4		
会社員	8	9	2	
公務員・団体職員 (教員除く)	1	11	1	1
教員	3	6		
学生・大学院生	1	3	1	
その他	5	17	4	1
計	52	122	15	2

グラフ 1：『月報』の各コーナーや記事についての感想



グラフ 2：今後『月報』で読みたい記事のテーマ



自由記述欄への回答から

自由記述欄にいただいたご意見の一部を紹介します（表記・文体等は一部編集しています）。

『月報』の各コーナーや記事について

- ・他にはない資料が紹介されており、読んでいて楽しい。また、来歴が詳しく紹介されていて勉強になる。
- ・「今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から」のコーナーは、国立国会図書館が持つ歴史や蔵書のスケールの大きさを感じながら読んでいる。また、「NDL Ngram Viewer」など、新しいサービスを知るきっかけともなっている。
- ・「世界図書館紀行」は、普段あまりなじみのない外国の図書館の取り組みについて詳しく知ることができ、とても参考になる。また、主に取次店を通さない国内出版物を取り上げた「本屋にない本」も、貴重な資料を多く紹介して、非常に興味深い記事になっている。
- ・「館内スコープ」をまず読む。とても面白い。
- ・以前2度連載されていた「国立国会図書館で働いています」が面白かった。以前は中堅職員の方が多かったような気がするので、今度は、若手やベテラン・上層部なども見てみたい。
- ・直近の号では憲政資料等の歴史的資料の本文や、納入時の保存状況写真を興味深く読んだ。その資料を1点ずつ確認し目録整備を行うと知り、感心した。
- ・内容が娯楽性に偏りすぎている。娯楽性の高い情報は広報リーフレットとして刊行し、年報を補完するような内容にして欲しい。
- ・興味のあるものは読みに行くが、そうでないものはあまり面白くない。興味のないものも少しでも興味を引くような体裁を検討して欲しい。
- ・将来、国立国会図書館で働きたいと考えており、『月報』で国立国会図書館の取り組みを知ることができるのは有り難い。「今月の一冊」のコーナーは特に面白い。本の内容だけでなく、その本ができた経緯を知ることができるとさらに興味が湧く。

全体について

- ・毎回、職場で回覧される冊子体を愛読している。ネットはなかなか閲覧できないが、冊子は目の前にあると必ず読む。予算が厳しいかもしれないが冊子体継続を望む。
- ・冊子体の刊行は止め、電子版だけでも良い。
- ・最新号は冊子で見ると、バックナンバーを確認する際はPDFが便利だと感じる。
- ・サイズが大きくなり、カラーになり、どんどん進化している感じがある。文字が大きいと助かる。
- ・資料のデジタル化の進展で、様々なビジュアルの誌面構成が可能となっていると思う。むしろこのような時代にこそ、文章自体の力が必要になる。資料紹介的な記事でも引用文献や画像の量は適度に抑えて、比較的コンパクトで読みやすい記事構成を望む。
- ・全体として、図表や写真が豊富に掲載されていて、分かりやすく、興味を引く構成になっているのが良い。「NDL Topics」で研修や新刊の情報を知ることが出来るのも有難い。
- ・企画、編集を丁寧にされているさまがうかがえる紙面だ。連載記事群で評価のあるものを、冊子体、PDFなどで刊行できないか。

試験の概要

(詳細は試験案内またはホームページをご確認ください。)

種類	受験資格※1	受付期間※2	第1次試験日	会場
総合職試験	H3.4.2～H17.4.1生	R7.2.3 (月) 10時 ～2.19 (水) 17時	R7.3.22 (土)	第1次試験は東京及び京都。第2次試験及び第3次試験は東京
一般職試験 (大卒程度試験)				
施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験)※3	S61.4.2～H17.4.1生 障害者手帳等所持		R7.4.19 (土)	東京
障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験)				

※1

- ・H17.4.2以降に生まれた方でも、総合職試験は大学卒又はR8.3までに卒業見込、それ以外の試験は大学・短大・高専卒又はR8.3までに卒業見込であれば受験可能です。
- ・日本の国籍をお持ちでない方、国会職員法第2条の規定により国会職員となることができない方、平成11年改正前の民法の規定による準禁治産の宣告を受けている方 (心神耗弱を原因とするもの以外) は受験できません。
- ・申し込むことができる試験の種類は、1つのみです。(総合職試験には一般職試験 (大卒程度試験) と併願できる総合職特例制度があります。)

※2

- ・受験申込みは、原則国立国会図書館ホームページの受験申込フォームからのオンライン申込みに限ります。当該フォームからの申込みができない場合は、郵送による申込みを受け付けます (受験申込書の郵送交付請求締切り：R7.2.10 (月) 必着、受験申込書による郵送申込締切り：R7.2.19 (水) 必着)。

※3

- ・専門試験は建築分野から出題します。

令和7年度国立国会図書館職員採用試験

令和7年度の職員採用試験を次のとおり実施します。

○職務内容

●総合職試験・一般職試験 (大卒程度試験)・障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験)

調査業務、司書業務、一般事務等の館務

●施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験)

施設設備の維持及び管理等に関する業務、設備新営・改修工事に関する設計・監理業務、設備に関する技術に係る調査研究業務並びに当該専門的知識を必要とする業務

○障害のある方へ

受験資格を満たせば、障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験)、総合職試験、一般職試験 (大卒程度試験)、施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験) のいずれか1つを受験することが可能です。

障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験) 以外の試験を受験する場合も、受験上の配慮を行います。

○専門試験 (記述式) の「工学・情報工学」の変更に
ついて

総合職試験及び一般職試験 (大卒程度試験) の第2次試験並びに障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験) の第1次試験の専門試験 (記述式) の選択科目「工学・情報工学」について、選択分野の「工学」「情報工学」を独立した2つの科目として出題します。

・令和6年度試験まで：選択分野「工学」「情報工学」から受験時に1分野選択

・令和7年度試験から：選択科目「工学」「情報工学」から受験申込時に1科目選択

その他の選択科目 (法学 (憲法、民法、行政法、国

際法から受験時に2分野選択、政治学、経済学、社会学、文学、史学 (日本史、世界史から受験時に1分野選択)、図書館情報学、物理学、化学、数学、生物学) の変更はありません。

○試験案内の入手方法

次のいずれかの方法で入手可能です。

- ・東京本館、関西館又は国際子ども図書館
- ・郵便で請求
- ・国立国会図書館ホームページからダウンロード

受験申込方法等の採用試験の詳細については、国立国会図書館ホームページの採用情報のページを参照してください。

URL <https://www.ndl.go.jp/employ/>



令和7年度採用試験ポスター



○問合せ・資料請求先

国立国会図書館総務部人事課任用係

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1

電話 03 (3506) 3315

FAX 03 (3581) 1758

関西館資料展示（第33回）「果しなき想像の果に—SFの想像力が創造した未来—」

未来を夢見るはてしなき想像力と、その夢を実現する科学技術によって、人類は社会を発展させてきました。本展では、想像の世界を描くSF小説と現実の科学技術に関する資料を対比させながら、宇宙技術やインターネットといった革新的な技術、万博やけいはんな学研都市のような社会実験となったプロジェクトなど、幅広いテーマの資料をご紹介します。人類の想像力と科学技術が生み出した社会の変容をたどること、現代社会が抱える課題の解決のヒントを探ります。未来を創造する力は、一人ひとりの想像力の中にあります。想像力を刺激し、新たな視点から社会を見つめ直すきっかけとませんか？



第33回関西館資料展示「果しなき想像の果に」ちらし

また、関連講演会を次のとおり開催します。ぜひご参加ください。

- 演題 人新世で残らないもの
- 講師 円城塔氏（作家）



円城塔氏（写真提供：新潮社）

- 日時 2月22日（土） 14時～15時30分
- ※講演後、当館職員による展示紹介を約15分行います。

- 会場 関西館大会議室（地下1階）
- 定員 150名（事前申込制・抽選制）
- 申込方法 当館ホームページ「イベント・展示会情報」の申込フォームからお申し込みください。（当館ホームページ「資料・情報」の活用「イベント・展示会情報」のイベントページ）

令和6年度国際政策セミナー「人口減少局面の地域の持続可能性」

国立国会図書館では、人口減少局面の地域の持続可能性をテーマとした国際政策セミナーを開催します。

近年、都市部への人口集中に伴い、都市部と地方の活力の偏在をどのようにすべきか、日本社会の在り方

が問われています。本セミナーでは、日本と大きく少子化が進む韓国において、人口減少下における都市・環境・交通に関する学際的な研究を行っているキム・テヒョン・ソウル大学教授をお招きし、キム教授による基調講演（録画、日本語吹き替え）の上映後、都市計画の専門家である瀬田史彦・東京大学准教授による解説と、パネリスト2名からの報告を行います。最後に、キム教授も交えた登壇者全員でパネルディスカッションを行い、日本の課題について考察します。

- 日時 2月21日（金） 14時～17時
- 開催方法 オンライン開催（Zoom使用）
- プログラム

〔基調講演〕

「韓国のトッパダウンシステムを基盤とした人口減少地域の支援政策」

キム・テヒョン氏（ソウル大学環境大学院教授（録画、日本語吹き替え）

〔パネルディスカッション〕

・コーディネーター

瀬田史彦氏（東京大学大学院工学系研究科准教授）

・パネリスト

キム・テヒョン氏

林和真氏（東京都市大学都市生活学部准教授）

近藤早映氏（三重大学大学院工学研究科准教授・東京大学先端科学技術研究センター准教授）

○申込方法 当館ホームページ「イベント・展示会情報」の申込ページからお申し込みください。

○募集人数 300名程度（申込先着順）

○問合せ先 国立国会図書館調査及び立法考査局調査企画課連携協力室

メールアドレス ml-ipseninar@ndl.go.jp

NDL Topics

中国国家図書館との第40回業務交流

令和6年11月19日から26日まで、国立国会図書館において中国国家図書館（NLC）との業務交流が行われ、NLCから魏崇（ウェイ・チョン） 国家図書館副館長を団長に、殷夢霞（イン・モンシア） 国家図書館出版社編集長、薩仁高娃（サレンガオワ） 古籍館副館長、韓新月（ハン・シンユエ） デジタル資源部副主任、王瀟（ワン・シャオ） 国際交流処館員の5名の代表団が来日しました。

東京本館では、まず基調報告として、両館の最近の動きについて双方から報告しました。次の「読書バリアフリーの推進」をテーマとするセッションでは、NLCからは視覚障害者向け閲覧サービスの模索と実践について、当館からは、障害者用資料検索「みなサーチ」を中心に視覚障害者等に対するサービスについて報告しました。続いて、「デジタル資料の利活用と長期保存」をテーマとするセッションでは、NLCからは、古典籍デジタル化事業や最新技術を利用したナレッジサービスの推進について、また、当館からは、資料デジタル化とOCR全文テキスト化による図書館サービスの拡充について報告しました。各セッションの質疑応答では、両館の今後の課題や展望に関し活発な意見交換が行われました。

その後、国際子ども図書館、関西館等の視察を行いました。



中国国家図書館との第40回業務交流

令和6年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会

令和6年12月9日、標記の懇談会が開催されました。これは、各府省庁と最高裁判所に置かれた支部図書館の充実に資するため、支部図書館長等を招いて毎年行っているものです。本年はウェブ会議システムによるオンライン形式で行い、支部図書館26館、分館6館から、54名の支部図書館長、支部図書館職員が参加しました。

国立国会図書館（中央館）からは、「国立国会図書館インターネット資料収集保存事業（WARP）」の現

状と課題」と題し、事業の歩み、収集対象、収集方法、官庁での活用事例、課題等を報告しました。

支部図書館からは、支部法務図書館の白石裕一兼任司書から「法務図書館の最近の動きと課題」と題し貴重書のデジタル化と中央館へのデータ提供準備について、支部文部科学省図書館文化庁分館の田中康成副館長から「文化庁分館の最近の動きと課題」と題し京都移転後の職員の図書館利用等の状況について、支部特許庁図書館の岡部裕兼任司書及び佐藤光昭氏から「支部特許庁図書館の最近の動き（現状）と課題」と題し図書館の庁内移転やシステム更改等の課題について、それぞれ報告しました。



令和6年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会
(中央館出席者及び支部図書館報告者・発言者)

NDL Topics

新刊案内

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第302号

ドイツにおける連邦警察オンスブズマンの設置―警察受託官法の制定―

イタリアにおける政党国庫補助関連法制―2013

年緊急法律命令第149号を中心に―

韓国のストーカー対策法制

中国…生態系保護補償条例の制定



A4 99頁 季刊 1,980円 (税込)
ISBN 978-4-87582-935-5
発売 日本図書館協会

レファレンス 888号

鉄道駅を起点としたまちづくり―大都市近郊における対応策と取組事例―

在宅医療の課題

物価への3つのアプローチ―「賃金と物価の好循環」の先へ―

米国各州の憲法改正州民投票における投票用紙掲載情報(資料)

諸外国におけるロビー活動規制(資料)



A4 147頁 月刊 1,100円 (税込)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812



40

東京本館 雪の日の新館喫茶前

NO.766

FEBRUARY
2025

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Tentai ryoko: Space travel in the Taisho era
- 07 Featured Dialogue: SUETAKE Yoshiya and MAEDA Ryosuke
The past and the future of searching for materials on modern Japanese political history
- 17 The ABCs of long-term preservation of electronic materials:
Can you still listen to those CDs?
- 22 Results of the questionnaire on the National Diet Library Monthly Bulletin
- 06 <Tidbits of information on NDL>
Web accessibility for everyone
- 21 <Books not commercially available>
Inkyunabura no jidai: Keio gijuku no seiyo shoki insatsubon korekushon to sono hirogari: Dai30kai keio gijuku toshokan kichosho tenjikai
- 25 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和7年2月号 (No.766)

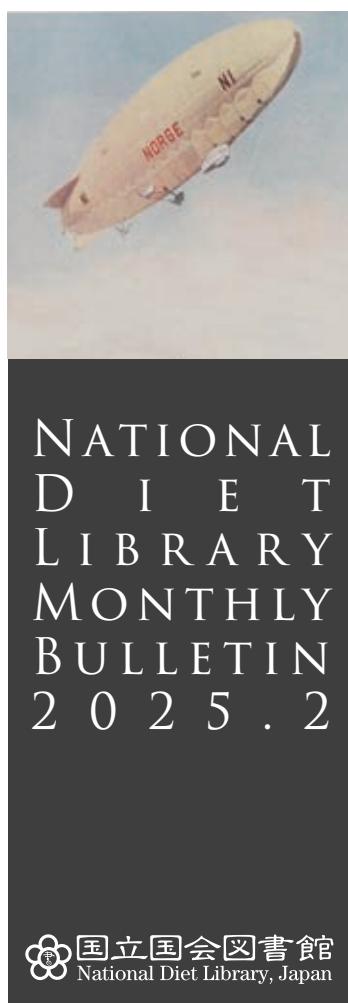
令和7年2月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 川西晶大
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



図

国

国

書

人

士